

---

# トラウマ

梶原 鷗

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

トラウマ

### 【Nコード】

N0951A

### 【作者名】

梶原鶯

### 【あらすじ】

家で突然起きた事件。かなの心の中に過ぎる嫌な予感・・・

## 事件

「ヤダ！無いじゃない！」

母の声が部屋中に響いた。

「どうしたんだよ。何が無いんだよ？」

突然大声を上げた母にたいして不思議そうに尋ねる父。

それは、私が小学校五年生の時の出来事だった。

私の家は、父・母・兄の四人家族。

父は、趣味が仕事といってもいいくらい土日も休まず会社へ出勤して行く人だった。

その為、家族でどこかに出掛けた記憶はほとんど無い。

私は、そんな父でも家族で一番スキだった。

母は、もともと専業主婦をしていたが兄が中学に入学すると同時にパートを始めた。

母も、土日もパートに出ていたので家に家族が揃うのは夕方～夜にかけてだった。

兄は、私と2個離れている。私とは違って、性格的に真面目だった。学校帰りも寄り道はしないで直帰するような子供だった。

私は…よくわからない。

「無いのよ。ちゃんとお財布に四万入れておいたのにないの…」  
母は慌ててグチャグチャになるまで探した。

「本当に入れておいたのか？間違ってるんじゃないのか。」  
父が何を言っても、母はそれどこじゃないらしい。

その様子を見ている私。

「かなは？」

母が小声で父に尋ねた。

父（…？）

母が私の<sup>かな</sup>のどこに来て聞いた。

「かな、お母さんのお財布いじった？？お母さんがお仕事してる時、

誰かおうちに来た？？」

首を横に振るだけの私。

「そう…。じゃあお兄ちゃんが帰ってきたら、お兄ちゃんにも聞いてみるね。」

そう言って母は、居間に居る父の方へ行った。

この時私は、小学校五年生ながらも自分が疑われているのでは？と不安が過ぎった。

## 異変（前書き）

- ・ 次第に変わっていくわたしの立場。これからどうなっていくのか・

## 異変

「ただいま」

夕方五時ぐらいだっただろうか兄の帰る声が聞こえた。

母が玄関に向かう。

「おかえり、猛。ちょっとお話があるから、手を洗って居間に来てちょうだい。」

そういつて母は台所に行きおやつの用意などをしていた。

兄は不思議そうな顔をしながら、手を洗いに行った。

その時、私は庭で犬のガルと遊んでいた。

「かな／＼かなも手を洗って居間にいらっしやい。」

いつもの優しい母の声とは違く何となくキツイ言い方にも聞こえた。

「分かった。」

私も返事をし手を洗って居間に向かった。

「これ美味しいね。お母さんが作ったの??」

「そうよ。美味しくできてよかったわ。」

兄は母が作ってくれたドーナツを食べていた。

「かなはいらないの??」

母の問に私はコクリと頷いた。

「あなたも居間に来て。」

母が庭に居る父を呼んだ。

全員が居間に揃うと母はお財布をテーブルに置いて話始めた。

「お兄ちゃん今日、このお母さんのお財布いじった?」

「僕いじってないよ!」

「そう、じゃあ今日おうちに誰か来た??」

「誰も着てないよ!」

首をかしげる母。

「おかしいわね・・・じゃあどうしてお金がなくなるのかしら?!」  
母は言いながら私のほうを見た。

「もういいだろ。なくなってしまったんだから仕方ないじゃないか！」

父が少し怒った口調で話すと母もそれ以上はなにも言わなかった。それからというもの、我が家では度々お金が無くなったり、母の指輪が無くなったりと物が良くなかった。

近所で空き巣がはやっていると言われているそうだ。

でも我が家には、土日は兄も私も家に居る。

平日は午後二時過ぎからは母が居る。

空き巣が入るには、遠慮がちな物がなくなっていた。

母からするとどうにも私が怪しかったらしい。

私は、学校では成績はそこそ良かった。

目立ちたがり屋で両親からは、でしゃばりだと良く言われていた。友達も多く、何かと母に欲しい物をねだっていたからだ。

でも私は取ってない…。

そんな事を考えているうちに、またお金が無くなったというのだ。今回は明らかに、しまっておいた戸棚がグチャグチャだった。

こうなってもうと、もはや私のせいにされるのは分かっていた。

「かな！今までは、お母さん何も言わなかったけどいつまで泥棒みたいな真似していくつもりなの？自分のしてることがはずかしくないの？」

いったいどれくらい母にガミガミ言われたのか覚えていない。

その日は、悔しくて押入れの中に閉じこもって泣いた。

次の日からだ、私に対する母の態度が変わったのは…。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0951a/>

---

トラウマ

2010年10月28日07時27分発行